〈研究報告〉　昭和54年度教育研究法講座

器械運動に診断・治療をとり入れた指導

―― とび箱運動「腕立て前方回転」 ――

二本松市立二本松第一中学校　前　田　　長

1　研究の趣旨

(1)　研究の動機とねらい

従来から，生徒たちの運動領域についての興味・関心の傾向は，器械運動等の個人的スポーツよりも球技系の集団的スポーツに片よっているといわれている。

〈表1〉からもわかるように，本校1年男子でも同じ傾向にある。

〈表2〉からは，嫌いな器械運動にあって，とび箱運動を好んでいる生徒が70%近くいることがわかる。

〈表3〉からは，切りかえし系のわざよりも，技能・情意面から高度さを要求される転回系のわざができない傾向にあることがわかる。

「できる」「できない」がはっきりあらわれる器械運動において，学習カードを有効に活用し，指導過程にひとりひとりのつまずきの解明とそれに応じた手だてを位置づけ，学習を進めることにより，技能が向上するとの考えから主題を設定し，この研究にとり組んだ。

〈表1〉運動領域の興味・関心調査1年男子(78名)

領域＼好き嫌い	好き		嫌い	
陸上競技	3名	4%	19名	24%
水　泳	17	22	13	17
球　技	51	65	2	3
器械運動	1	1	33	42
格　技	6	8	11	14

〈表2〉　器械運動の内容についての興味・関心調査

内容＼好き	1番好き		2番好き	
マット運動	15名	19%	32名	41%
鉄棒運動	9	12	31	40
とび箱運動	54	69	15	19

〈表3〉　とび箱運動の到達度

題材＼到達度	できる	できない	到達度
腕立て開脚とび	75名	3名	96%
腕立て閉脚とび	71	7	91
台上前転	73	5	94
腕立て前方転回	22	56	28

(2)　問題点

とび箱運動の問題点として，次の点があげられる。

①　生徒側

ア　体力の個人差と情意面の障害により，転回系のわざを積極的にやりたがらない。

イ　到達目標や学習方法の理解不足から学習意欲が低い。

②　教師側

ア　画一的な一斉指導が多く，個別指導の機会が少ない。

イ　技能，認知，情意面のつまずきの診断がよくなされず，それに応じた手だて，つまり治療が十分行われていない。

ウ　用具や視聴覚教材教具を十分活用していない。

(3)　仮説のための理論

①　保健体育科における「つまずき」とは，技能，認知，情意の三つの面から考えなければならないが，とび箱運動では「技能」「情意」のいずれか，または二つの面が原因でできない生徒を「つまずき」とする。

②　診断とは，ひとりひとりの生徒について，つまずきの原因を明らかにすることである。

③　治療とは，診断の結果にもとづいて，ひとりひとりの生徒への適切な処法を考え，再または再々指導を加えていくことである。

2　仮　説

「腕立て前方転回」の学習において，学習カードをもとに診断・治療を実施し，つまずきを解決していけば，ひとりひとりの技能は高まるであろう。

3　研究計画

(1)　研究方法　　一群法

(2)　研究対象　　第1学年1，2組　男子38名